

高級中華料理店の門口では、中高年の男三人組がそれぞれ独特の衣裳を着て並んでいる置物を見かけることがある。彼らはまた新年に縁起物として壁に貼られる年画のモチーフにもしばしば登場する。これは三星神と呼ばれる神様で、それぞれを「福」、「禄」、「寿」という。「福」は文字通り幸福を、「禄」は富貴を、「寿」は長寿を象徴している。何のことはない。庶民の欲望が神様の姿になって具現化したものだ。

三星神の中でとりわけ興味深いのは「禄」である。その格好は官服に身を包み、長いひげを蓄えた偉丈夫で、いかにも位の高い役人風なのだが、彼は「貴」だけでなく、「富」をもかなえる通力を持ち合わせている。

中国には「陞官発財」という言葉がある。「役人になって金を儲けること」だが、「役人になること」と「金を儲けること」とがセットになっているのが面白い。「書中おのずから黄金の屋あり、書中おのずから万石の米あり、書中おのずから玉のごとき美人あり」と、勉強して役人になったら

金が儲かり好きなことができると周りもあおりたてる。科挙に合格して役人になると名譽を得るだけでなく、金も入ってくるとなれば、しがたない庶民が「禄」の御利益に少しでも与ろうと思つのも無理からぬことだつた。

むかし浙江の紹興^{しやうきやう}では、女の子が生まれると、その子が結婚する際、婚家で祝い客に振る舞うために仕込んだ酒を「女兒紅^{じよじこう}」といったが、男の子の場合は「状元紅^{じやうげんこう}」と称した。その子が将来科挙の主席合格者である状態になった時に親が提供する酒を意味した。そこには息子が高官となつて榮華を極める人生を送つてほしいとの親の願いが込められている。現実問題として状元はおろか、科挙に合格することすら恐ろしく困難であつたが、あわよくばと思つ親は庶民の数だけ存在した。

もつとも知識人にとってこれは現実であり得ない話ではなかつた。とりわけ親が官僚であつた家は、息子が生まれると大いなる期待を彼にかけた。親族もまた族内に「神童」が出現すると、将来の恩恵に与るべく先行投資に余念がなかつた。「神童」が成長して科挙に見合う能力を備えるようになった場合はまあよいとしても、往々にして「ただの人」になるため、周りから期待を一身に受けたプレッシャーに押しつぶされてしまう悲劇もしばしばあつた。

さらにまた、よしんば科挙に受かつたとしても、官僚として成功を収めなければ、親や親戚の願望は成就しなかつた。しかし、科挙に合格できる受験能力と官僚として生身の人間を相手に機敏に対処する実務能力とはまったく性質の異なるものであり、そこでの成功、というより失敗し



福祿寿塑像



福祿寿年画

ないことは科挙に合格するよりもさらに難しかった。何とかその試練にも耐え、事なきを得て、退官の日を迎え、生まれ故郷に戻って官僚としての実績と現職の時に築き上げた財産をバツクに悠々自適の余生を送るようになれば、初めて「禄」による幸せを得ることができた。そうした順風満帆の官僚人生を手に入れるのが彼らの最終目標だった。

とはいえ、中国の知識人のみながみな、みずからの栄華のためだけにあってこのような至難の人生に挑戦したわけではない。孔子は「君子は義に喩^より、小人は利に喩^よる」と言っている。まっ

とうな知識人が立派な人間である君子たらんと自負するのであれば、自身の利益を求めるだけのために役人になる小人であつてはならず、「義」を常に念頭に置かねばならなかつた。

では、「義」とは何か。儒教の代表的な經典の一つの『大学』の冒頭には、「大学の道は明德を明らかにするに在り。民に親しむに在り。至善に止まるに在り」とある。すなわち、君子が学問を身に着ける目的は、第一にみずからの徳を世に明らかにすること、第二に人民を親愛すること、第三に至善をよりどころとして行動することにあるという。知識人の理想の姿は自分の身を修め、やがては官僚として「治国平天下」(国を治め天下を平らかにする)を実現することであると説く。幼い時より「聖人の道」を叩き込まれた中国の知識人たちの中にはこの使命をまじめに実行すべく、学問に励んで儒教を会得し、世のため人のために尽力しようとした者も決して少なくなかつた。

本書のナレーターは、状元とまではいかなかつたものの、科挙に合格し、苦勞の末に二つの梟の長官を担当した一人の知識人であり、役人のためのハンドブックである官箴書『福惠全書』の著者として知られる黄六鴻（おうりくこう）にお願いした。ここでは彼の実体験とともに同時代の他の知臬経験者の助言をも加味して、こうした官僚人生を過ぐすにはいかなることが重要だったのかについて懇切丁寧（ていねい）に語ってもらつた。

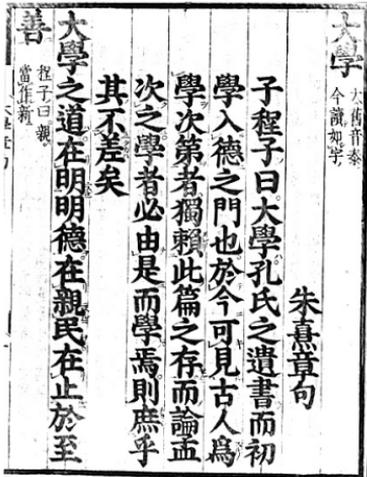
黄六鴻は歴史の教科書に名を留めるほどに華々しく活躍したわけではないが、順調な官僚人生を歩んだ人物の一人であつた。また中央の監察部門である都察院の高官に昇進したのを最後に退官し、その後長年にわたつて学者生活を営み、当時としては異例の長寿をまつとうした。その

意味では「福」「禄」「寿」を体現した「勝ち組」の一人であったといえる。

ただ、彼の場合、官僚人生をめざす知識人の先の二つのタイプのうち、自分自身の栄達のみに関心を持つ前者であるとは必ずしもいえなかった。どちらかといえば後者に近かったかと思われる。政界引退後は名利にさほど執着することなく、余生の多くを著作に費やしたことからそれがうかがわれる。

とはいえ、彼は単なる理想主義者であつたわけでもない。官僚人生の第一歩とでもいうべき知県の実務行政にも能力を発揮し、現場での鋭い判断力と素早い決断力とでもって県政においてし

『大学』



清黃六鴻思湖著

福惠全書

日本小畑行蘭訃譯

詩山堂藏梓

和刻本『福惠全書』封面

ばしば生じる難題を解決に導いた。また、政策実行の抵抗勢力である県署の役人や地元の人間たちに対しても冷静な観察を怠らず、応接も誤らなかつた。その結果「順調な官僚人生」を歩むことに成功した。

『福恵全書』には知県になるための心得や知県となつてから赴任する土地と人間に関する諸注意、県政において発生した諸々の魍魎ちみもろりよう魍魎事件の顛末などが詳細に語られている。黄六鴻はこの書を通して当時の県政のコツを後進の知県たちに伝授し、任地の住民に書名が示すような「福恵」を施す「義」の実践を期待したに違いない。

だが実際のところ、黄六鴻およびその忠告を受けた後輩知県たちによつて治められた民衆は果たして「福恵」を文字通り享受したのであろうか。そこにはまさしく儒教政治の理想の下に統治された人々の現実が垣間見られる。

そこで以下、清代の知識人がめざした官僚人生とは何だったのか、ひいては現代に通じる「中国のお役人」とはどういうものなのかという問いかけの一端を黄六鴻本人の口を通して直接明らかにしてもらい、そのような官僚人生について自省の弁を伺おうと思う。

なお、黄六鴻は十八世紀初頭に死んでおり、当然のことながらその後の中国の県政状況や現代日本の社会事情などを知る由もないが、そこはそれ、ナレーターとしての役目の都合上、どういうわけか、これらの知識をも備えているという設定になっている。この点はあらかじめご了解願いたい。